

九八 家 號

わが小竹園ささきといへる園號は、往年金子薰園先生の選びとらせ給ひしところ、爾來久しく用ゐてゐるが、先年拙著拾葉帖考證を、森鷗外博士に呈上した時、博士から數項に涉つて、不備の點を示教せられた中に、森小竹園といふことは不可なるべく、小竹園主又は主人森某とあるべき歟との一條があつた。家號を氏の下へ、直ぐくつつけることは屋上の屋で感服しない。博士なればこそかうした些事をも、忽にせられないのであるが、世間の多くは無關心に過してゐる。さて、この家號は雅號と共に、昔から文人墨客の間にひろく用ゐられ、その名も種々に分れてゐるものゝ、先づ

何々堂、軒、園、齋、屋、家、舍、樓、庵、亭、坊、房、館、廬、室、居、莊、社、苑、
窟、岫、巢、窠、洞、寮、處、村、窩、窓、院、戶、本、林、書屋、詩屋、畫屋の類

といふ位に止るであらう。無論、家號と雅號を併用のものもあり、また一人で慾張つて、二十

三十と雅號をもつてゐるものもあるが、今心付きのまゝにこれを各自の畑にならべてみると、各其の據るところが故意か偶然か、略々同じ所に固まるのを見るのである。

儒者、漢詩人、書家の部類には、堂を用ゆるものが多く、伊藤仁齋の古義堂、新井白石の天壽堂、雨森芳州の綱尙堂、林羅山の尊經堂、頼杏坪の春草堂、市河米庵の小山林堂などあり、次に軒では、林春齋の葵軒・向陽軒・野中兼山の明夷軒、柴野栗山の古愚軒、佐藤一齋の老吾軒など。洞、館、社では、木下順庵の薔薇洞、僧信海の覺花洞、服部南郭の芙蓉館、麻田剛立の先事館、安藤東野の白楡社、柏木如亭の晚晴吟社。又、長野豊山の積陰書屋、龜谷省軒の惜陰書屋、川田壘江の行雲流水書屋、頼山陽の山紫水明樓など、何れも堂々たる呼稱は、儒學方面の其の人らしい感じが出る。と共に、太宰春臺の紫芝園、鹽谷宕陰の九里香園、立原杏所の玉琇舎はどうも優し味があつて、何となく似付かぬやうな感じがなないでもない。

國學者、歌人となると、流石に線が柔くなつて、園、屋、舎の類が多い。香川景樹の桂園はいはずもがな、加藤千蔭の菜園、片岡寛光・村田春門の郁子園、加納諸平・大橋長廣・吉川樂平の柿園、山本清樹・林良本の龜園、中島廣足・木村定良・吉岡信之の樞園、栗原信充・石川依平・海野幸典・伊藤祐命の柳園、僧亞元・大國隆正の葵園、岩下貞融・渡邊重春の櫻園、水

花園・石川雅望六樹園等、重田一九十返舎、曉鐘成鶏鳴舎等、其他、立川菟馬談州樓、北川眞頼狂歌堂など、その主なるものであるが、大抵、これ等の數種を出ないやうである。

繪師は、狩野家が多く齋であり、歌川家も亦皆、齋であるのみならず、英一蝶の狩林齋・鹽川文麟の可竹齋・守住貫魚の回春齋等多く、次に松村吳春の三葉堂・岸岸駒の可觀堂・松本交山の七草堂、高久靄崖の晚成山房、兒玉果亭の竹僊山房、木村秀嶽の玉帶館、幸野榎嶺の青龍館などを擧げ得るが、まづ此の邊のところ、例外は多く無いやうである。

その他、俳優は成田家、橋家等の家を以てし、僧侶は庵、坊を用ゐてゐる。かう列擧して見ると、窟・岫・寮・處・村・窓などが割合に少く、和田吳山の金剛窟、入江昌燾の幽遠岫、幸野榎嶺の金仙茶寮、坂本浩然の管草林處、林羅山の梅花村、龍草廬の明々窓の如き珍とすべく又花の本・椎の本・栗の本・月の本・閑花林・十六林といふ風に、本、林を用ゆるは俳人に限るのであらう。

以上はたゞ思ひよりであるから、無論順序も何も立つてゐないが、もつと具體的に、統計的に調べて見たならば、或は興味ある何物かを掴み得るかも知れない。